

# 所感

## コロナショック

会長 鎌田英明



所感の原稿を書かねばと思っていたところに思いもよらない出来事が起こってしまった。以下は会員諸氏も良くご存じのことではあると思うが、異常事態が起こった2020年の記憶として敢えて書き記したい。

年初から中国湖北省武漢に端を発した新型コロナウイルスの感染が、中国国内に止まらず日本を含む世界各国に拡散し、パンデミックの状態になってしまった。当初の報道では武漢地域に限局した地域性の肺炎とのことで、症状もインフルエンザよりも軽いという話だったのだが、日を追うごとに感染者、更には死者の数が世界的に増え続けパリなどがロックダウン（都市封鎖）されるなど大変な事態になってしまった。

各種集会の自粛が叫ばれ始めた時点では、そこまでしなくてもとの思いが、私も含めて多くの人達にあったように思う。しかし、思った以上に事態は深刻となり、火の粉は我が神皮にも降りかかってきた。3週間後に開催を控えていた第162回例会を、感染拡大防止の観点から中止するべきなのかという重い決断を迫られる事態に至った。横浜港には船内に感染者を抱えた豪華クルーズ客船ダイヤモンド・プリンセス号が停泊し、下船する人々からの2次感染も噂されていた。常任幹事会にも諮り、断腸の思いではあったが中止を決定した。この日のために2年以

上前からご苦勞を重ねてこられた担当幹事の松岡晃弘先生の思い、中止によって発生するキャンセル料金の負担、そして最も重く覆い被さったのはこれまで53年間一度も欠かすことなく年3回開催されてきた神皮例会の伝統を、ここで途切れさせてしまうのかという重圧であった。色々な思いが駆け巡った1週間ではあったが、会員、更には講師の先生方の健康には代えられないと中止の決断をした。その後、感染源の明らかではない患者数が増え続け世界中に蔓延したことから、ついにはオリンピックTOKYO 2020も1年延期されることになってしまった。経済も急激に落ち込み、この先どうなるのだろうという厭世感が地球規模で漂い始めている。そしてついに緊急事態宣言が全国に発令された。

私自身も神皮例会を皮切りにほぼ全ての会合が中止となった。そうしてみると、改めてこれまでいかに多くの集まりがあったのかと思い知らされた。休日も外出の自粛要請が出されて、孫たちも来なくなり寂しい思いをすることになった。家内と二人で過ごすことが多くなり、日頃会議だ、講演会だと逃げ回っていた庭木の手入れをしたり、かねてからの家内の念願でもあった断捨離の手伝いをしたりと、まるで定年後の生活の予行演習かと思わせる毎日になってしまった。

この拙文が載る神皮27号が発刊される頃にはいったいどういう状況になっているのだろうか、現時点では誰にも予測がつかず、収束までには1年くらいは必要だとの見解を示す専門家もいて、見通しはどうしても暗くならざるを得ない。

河原編集長に締め切りをギリギリまで延ばしてもらって書ける限りを記した。今は1日でも早く世界中に笑顔が戻ることを祈るばかりだ。たかがウイルス、されどウイルス。



横浜港に停泊するダイヤモンド・プリンセス号

# すべてが消えた3月

副会長 浅井俊弥

娘婿の父の招きで、2月10日から2泊3日で家族で台湾に行った。武漢、湖北省における新型コロナウイルス感染症の流行をうけ、普段は大混雑になるらしい台北101の飲茶のお店も、本土からの中国人観光客の減少で、比較的すいている。九份などの観光地もいつもとは違う静けさに包まれている。ただし町を歩きかう人はマスクを着用していて、開店前のドラッグストアには10人ほどの行列があった。

ただそれだけだと思っていたが、帰国後すぐに状況は一変する。チャーター機の帰国者やクルーズ船の乗客で感染患者が増えていくにつれ、医師会で企画していた講演会はすべてキャンセルとなり、各種委員会もほとんど自粛。3月1日の本例会、4月の日臨皮総会も予定通りの開催を断念した。神奈川県医師会は2月12日に対策本部を設置し、クルーズ船乗客の健康状態の把握とPCR検体の採取のため、JMATの派遣要請を受け、50名ほどの医師会員が乗船した。感染機会が追えない市中の感染者やクラスターからの複数の感染者の出現で、状況はさらに悪化。3月11日にWHOがパンデミックと宣言し、全世界での患者が3月末で50万人を超え、東京オリンピック・パラリンピックも1年ほどの延期が決まった。学校の一斉休校、スポーツやイベント

の開催自粛、渡航制限、外出の自粛など、県や国からの要請を受け、われわれも対策を強化することになる。各国でマスクなどの防具の不足から医療従事者の感染が拡大し、5万人がすでに罹患しているという。

無症候や軽症の感染者が市中に存在している今、皮膚科開業医の不安は、自院を受診する患者に感染者がいたらどうなるのかということだろう。もし、自らが発症すれば、2週間の休業を余儀なくされ、その後に噴出する風評被害で経営が成り立たなくなる恐れもあるだろう。万が一、受診した患者があとで感染者だと判明した際はどうなるのか。この点はしっかりと押さえておく必要がある。医師が濃厚接触者にあたるかどうかを判断するのは保健所で、われわれはその指示に従わなければならない。保健所が診療の際の状況、すなわちマスクを着用していたか、診療後の手洗いやアルコール消毒を行ったかなどを調査し、環境感染学会の指針に照らし合わせて判断を下すことになる。詳細は省略するが、少なくとも医師側がサージカルマスクを着用し、エアロゾルを生じさせるような処置を行わず、診察の後に手洗いをしておけば濃厚接触者にはあたらず、休業を回避できることになると知った。

3月に入ってからは、普段はあまりすることのないマスクを着け、診察待ちが10人以上になれば、窓を開けることにした。マスクを着けての診察は、どうも自分が病気になったような気がして、滅入る。早く感染が収束し、普段通りの営みに戻る日が来ることを願いたい。(記3月29日)

